

創立 50 周年記念号の 発刊にあたって

取締役社長 江 本 寛 治



私が川崎製鉄に入社したのは 1958 年であるが、その前年学生時代の見学旅行で八幡製鉄所における上吹転炉の実験を見る機会があった。当時、平炉—造塊全盛の時代、鋼種も脱酸程度によって、リムド、セミキルド、キルドという三種があり、それぞれ製品の特性の要求によって使い分けられていた。それが今、転炉—連続鑄造という革新的なプロセスの開発によって、リムド、セミキルドという言葉は死語になった。

技術の世界にも守旧派がおり、造塊材から造られている製品を連続鑄造材に切り替えることに対する反対、あるいはリムドをキルドにして連続鑄造化すれば、それは損でありやるべきではないという反対、などなど今から思えば嘘のような話がまかり通っていた。

しかし、それらの反対意見が実験と工程生産の実績の積み上げによって駆逐されるのにはそれほど長い年月を要しなかった。

それは何故か。

守旧派がいる一方で技術の世界に限らず、「とにかく試みよう」という前向きな先進派が一方にいるからである。特に上層部が先進的な時、そのリーダーシップの発揮が技術を飛躍させる。

旧来の技術を守るのはマネジメントであり、変革することがリーダーシップなのである。もちろん、物づくりにおいては品質、生産の安定を確保するために管理すなわちマネジメントは極めて重要である。

しかし、上級の技術者により強く求められるのは、技術をイノベートしようとする強いリーダーシップである。過去、当社においても大型の技術開発に成功した事例は例外なく上層技術者の強いリーダーシップが発揮された場合である。

20 世紀後半の鉄鋼業におけるイノベーションは目覚ましいものであった。それはどちらかと言えばプロセス技術が先行し、その果実として材料技術の進歩があったように思う。

さて、次の 21 世紀はどうか。私は材料技術、たとえば超微細粒鋼のような革新的な材料の開発が逆にプロセス技術の開発、展開を促すように思えてならない。